
見えない”あいつ”

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「見えない”あいつ”」

【Nコード】

N9105H

【作者名】

kurouyumi

【あらすじ】

『おはよ〜』これが全ての始まりだった……。突然女の幽霊にとりつかれた高校生、秋月夕。彼にとりついた幽霊の引き起こすドタバタ劇に巻き込まれて……。

プロローグ

突然だがオレ・・・秋あき月つき夕ゆうは1人暮らしだ。

母親は10数年前に他界。父親が男手1つで高校生まで育ててくれた。

その父親も今はフィリピンに単身赴任している。(海外への単身赴任と左遷との

違いがいまいち分からなかったが・・・)

そして春休みも終わり、オレは高校2年生初日の朝を迎えていた。

『おはよ〜』

頭の中で突然女の声が響く。

いやいや、オレは自分で自分にあいさつするほど寂しがりやじゃない。

脱衣所とリビングルームの2つしかない狭い部屋をみまわす。

『こつちこつち・・・見えないのお？

しょーがないなー・・・ほら』

テレビの画面の中から白く半透明な手がすうー・・・と出てくる。

「!?!」

この時オレは窒息寸前の魚みたく口をばくばくさせてた。
気絶しなかったただけマシだと思う・・・うん。

Good or Bad GHOST

「……つまりあなたは、あ……いわゆる幽霊っていう存在ですか？」

寝巻きのまま布団の上に正座してオレは尋ねた。

『まあね。でもわたしってまだ成りたてだからさ、幽霊に。自分でも実感湧いてないのよね〜』

女の声だ。たぶんオレと同じくらいの歳の。ただ、問題なのは姿が見えないことだ。さっきは見えたのに……。

「はあ……。」

『“はあ”ってリアクション薄いなあ、きみ。なんかもつところ”マジっすか!?”とか”ほんとですか?”とか言えないの!?!?』

”マジ”も”ほんと”も同じ意味ですけど……? 心の中に生じたこのツツコミを口に出す勇氣はなかった。

「はあ……すみません」

『……もういいや。それよりいいの?こんなゆっくりしてて。もう学校に行く時間じゃない?』

時計を見てみると時刻はジャスト8時。

「ヤバツ!！」

ばたばたと慌てて学校に行く準備をするオレの様子がおかしかったのだろう。

見えない声の主はけらけらと快活な笑い声をたてた。

誰のせいでこうなったと思ってんだ!!

『そういえばきみの名前聞いてなかったね。

なんて〜の?』

「秋月夕あきづきゆづです」

それよりなぜ付いてきてるんだ?この人。なぜ、また姿を消したんだ?

学校までの道を歩いていた時にふと思った。

『ふうん。まあ、わたしのことは置いて・・・』

おいおい。

『いくつ?』

「16です」

『たいして変わんないじゃん。いいよ、タメ口で。わたし18だし』

享年が・・・だろうか?

じゃあ、と言ってオレは数ある疑問のうちの中からあるものをチョイスした。

「なんでオレに取り付いたんです・・・取り付いたの？」

『・・・・・・・・さあ？』

「さあ？」って・・・・・・・・」

『いや、だってわたしもよく分かんないし。』

言ったでしょ？成りたてだって。つまり新人よ、新人』

変な幽霊ヤツだなあ。

『でも、こんな力あるってことは知ってるのよね』

すぐ側を一筋の風が駆け抜ける。

それを追うように視線を動かすと、目の前にウチに学校の女子生徒がいた。

風が舞い、制服のスカートが普通ではアリエナイくらいまくれ上がった。

そして、スカートの下にあった白いものが・・・・

「きゃー！」

スカートをおさえ後ろを振り向いたその時、オレとばっちり目が合う。

そしてまるでオレがまくったといわんばかりににらむと逃げるように去っていった。

『ね?』

無邪気な声が響く。

いや、むしろ得意げと言ったほうがいいかも。

『あれ?赤くなってる!』

ハハツ、かわいいい〜〜』

嫌な予感がした。このまま学校にこの女の幽霊を連れて行ったらマズイことになる。

この予感は見事に的中した。

校長の悲劇

「おっ、ユウ久しぶりじゃん。」

「ああ。1分ぶり。」

1年生のときに引き続いて前の席にはオープンで焼いたんですかと聞きたくなる

ぐらい焼けた、堺明弘さかいあきひろ……友人の姿があった。

新2年生のクラスをざっと見渡すと1年のとき同じクラスのやつが結構いたので安心した。

「……でき、皆ばたばた倒れてくわけ。

ハゲもやつと『これはやばい!』って気づいたみたいで……

ユウ?お前どっか調子悪い?」

春休みの間のテニス部の練習を話していた堺がオレの顔を覗き込む。

「ん……いや。大貫先生おおぬきがどうしたって?」

「ハゲのことはどーでもいいけど、お前顔色悪いぞ」

調子が悪いように見えるか。

実際に調子を悪くする原因がオレのすぐそばにある。

『ホントだ顔色わるい。どしたの?』

あんたのせいですよ、あんたの。

登校中の事件以来、胃の中になにかいや〜なものを落とされた気

分だった。

またなにかしでかすんじゃないかと気が気じゃない。

「今日はあと始業式ぐらいだろ？それが終わったらさっさと帰るよ」

「ああ。そうしたほうがいいぞ」

『早引けしたほうがいいと思うけどな〜』

人の気もしらずにのんびりとした声が聞こえた。

『ふあああ〜あ・・・ふあああ・・・ヒマ』

どの学校でも「ーゆー行事で言うことって退屈なんだね』

同意を表すためにうなずく。

むこうはオレの心に直接話せるがどうやらこちらからは口に出さな
いと

言葉が通じないらしい。

校長は延々と話し続けている。

『話をまとめると、や。』

”皆さんが元気に登校してきてくれて嬉しいです。

1年生は早く学校に慣れ、2、3年生は気を引き締めて頑張り
ましよう”

『でしよっ？』

うなずく。

『それをよくもまあこんなに長々と……よ……し』

”よ……し”？始業式でこんな言葉使う必要ある？
なにも張り切る必要ないですけど。

「……………ですから、勉強というものは……………うっ！

……………んぐ！…！」

ぺらぺらしゃべってた校長が突然のどを押さえる。

顔がどんどん赤く、いや青ざめて……………そして倒れた。

騒然とする体育館の中でただ1人オレだけが石になったように固まっていた。

長い1日の最後の幸福

『いや〜失敗、失敗。』

まさか窒息するなんて・・・でも死ななくてよかったね』

校長は病院に運ばれたが命に別状はなかったらしい。
それでもオレの怒りは収まらない。

「やりすぎだつて！え！？殺す気かよ！

やっぱあんた悪霊なんでしょ！？」

『もし、わたしがホントに悪霊だったらどうするの？

勇気あるよね〜きみ。悪霊相手によくそんな口聞けるね』

学校からの帰り道、ずっとこんな感じで言い合いをしていた。

「夕チわり〜」

『へえへえ、どうせ性悪女めいざしゅですよ』

「秋月くん！」

振り向くとばたばたと走ってくる人が・・・。

「山口さん・・・どーしたん？そんな走って」

「いや・・・はあ、はあ・・・ちよつと待って・・・息が・・・

」

ひざに手をつき、息を整える。さらさらとした艶のある髪が前に流れた。

「落ち着いた？」

「……ふう、うん。」

「っで、なんだっけ？」

「がくっ。」

「いやいや、山口さんが用があつたんじゃないの？」

「あ！そうだった。」

「調子どう？今日からだの具合が悪かつたんでしょ？」

「まあまあかな」

どーでもいいような話をしながら、2人で並んで歩く。傍から見たらカップルに見えるんだろうな。でも、違う……少なくとも、今は。

「じゃ、おばさんよろしく」

「うん。たまには寄ってね。」

お母さん、秋月くんの顔さいきん見てないから心配だって言うてたから」

早くに母親を亡くした父にとって山口さんのお母さんは頼れる人だったのだ。

1人も2人も変わらないという考えでオレと山口さんを育ててくれ

た。
いわば育ての親・・・かな。

『ふ〜ん・・・彼女、きみの”これ”？』

アパートの自分の部屋に入った途端声が響く。

姿は見えなくても、小指を立て、にやにや笑っているのが目に浮かぶ。

「残念ながら、違う」

『へえ〜〜・・・』

またイヤな予感がした。

何も起こらなければいいが・・・たぶんそれはナイだろう。

雨とシャワーと誤解と・・・

例の女の幽霊が住み着いて早1週間。

女と2人暮らし・・・さぞかし色っぽいことに・・・と考えたあなたは甘い。

オレは外見より中身派ではあるが相手の姿がまったく見えないのは話が違う。

「・・・・・・・・いつてきます」

何も言わずに出て行ったその夜に金縛りにあい、延々とラップ音を聞いた。

本人は違うと言っているが・・・・・・・・。

『あ、待って待って・・・・・・・・はい、これ』

折り畳み傘がふわふわととんできた。キャッチしておそらくいると思われる場所を向く。

「今日晴れだけど」

『いや、絶ッ対降るから。わたしとNHK、どっち信じるの』

そりゃもちろんNHKです。

と思ったがへタなこと言っつて機嫌を損ねるのも考え物。折りたたみなら邪魔にはならないな。

「じゃ、持つてく」

『素直ね。イイ子、イイ子。』

『あ、わたし今日1日家、空けるから』

「分かった」

どうせ映画館に忍び込んでただ見でもする気なのだろう。
幽霊ってのはいいね、まったく……。

「げっ！雨かよ……中練か……」

今日は試合形式でやる予定だったのに……。

さかいあきひろ
堺明弘が授業中にも関わらずため息をついた。

オレはあいつもたまには役に立つことするんだ、と思った。

午後から降り始めた雨は結局夕方……一般生徒きたくがが帰る時間になっても

止まなかった。

多くの生徒は傘を持ってこなかったらしくカバンを頭に乗せてダッシュで帰っていた。

そんな中でオレは悠々（ゆうゆう）と傘をさして帰ろうとしたがあ
る人が目に付いた。

「山口さん……？」

昇降口に立ち、物憂し気に雨を眺める姿に正直どきっとした。

つぶやきが聞こえたらしく、オレのほうを向くと困った、というふう
に笑いかけてきた。

「傘、ないの？」

「うん。NHKが今日は1日中晴れだって言うてから……」
NHKめ。

「傘、貸そうか？」

「うん、いいよ。そしたら秋月くんが困るでしょ？」

「……あ、そうだ！傘に入れてくれない？途中までいいから」

「ええ！？」

マズイ。これはマズイ。なにがマズイのか？といわれると言葉がつかまるが……。

「ねっ？いいでしょ？」

結局笑顔に押し切られた。

もともとそれほど大きくもないので2人とも肩がはみ出し、濡れてしまった。

オレのアパートが見え始めたちょうどその時、トラックが猛スピードで突っ切っていった。

水たまりがはね、制服が泥みずで汚れてしまった。

山口さんを見ると、道側にいたせいでオレよりもヒドイことになっている。

「くしゅんー！」

どうしてあげるのがベストだろう？
ともかく”あ、着いた。じゃあ、またね”と言ってずぶ濡れの人を
行かせるのは気が引けた。

「そういえば秋月くんの家に入るの初めて」

興味深そうにオレの部屋の中を見渡す。

「とりあえず……どうしたらいい？」

「ん〜……タオルかしてくれない？寒くて寒くて……」

「OK」

オレが”へんな気”を起こす前に帰ってもらおう。
タオルを取ろうと、脱衣所のドアを開けたときシャー……という
音がした。

……風呂場から。

オレは凍りつく。

「あ、ユウちゃん帰ったのお〜〜？」

「シャワーかりてるわよおん。いいでしょ？だってわたしたち……」

乱暴にドアを閉める。ドアを背にして山口さんを見ると、目を大きく開き

根が生えたように突っ立っていた。

「や、山口さん……これは……」

「彼女さんがいるなら……言ってくれば良かったのに……」

「ご、ごめんね！なんか来ちゃいけなかったみたい！」

「ちよつと……なんでドア閉めちゃうのお？」

わたしのナイスバディ見たいでしょ？ふふ」

黙れ！

「ごめんなさい！！」

山口さんは部屋のドアを蹴破る勢いで出て行った。
手を伸ばしたが届くはずもなく、宙を虚しくかいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9105h/>

見えない”あいつ”

2010年10月20日03時50分発行